

MBAの基盤に築かれた“現場と理論”重視のプログラム

2003年4月にスタートした早稲田大学大学院のMOTスクールは、既存のMBAコースをベースとしたプログラムだ。「MOTは技術ではなく、あくまでもマネジメントのイシュー」と、吉川智教教授は語る。経営者がどう判断するかという意思決定メカニズムの策定は、MBA、MOTの両方に共通する主題だ。そこにたとえば、規格の選択やアライアンス戦略といった技術の理解の必要があればMOTの領域となる。

吉川教授は「21世紀の経済学、経営学は20世紀のそれとはまったく違う」とも言う。20世紀には優れた技術がそのまま製品開発に直結、一定の成果を収めた。21世紀型の経営課題は、顧客のニーズ、マーケットを意識した技術の探索であるという。「色合い、肌合い、あるいは女性受けするか。そうした感性の部分までが領域に入っている」。同じくMOTコースで教鞭を執る田村泰一助教授も、ユーザーオリ

エンテッドな発想の重要性を説く。

マーケットから見た課題を設定することの重要性。この命題へのアプローチとして早大では、自らビジネスや経営の問題を発見して解決する能力の育成を重視している。じつは、この点が技術者たちの弱点なのだという。学生の多くは「分析能力は高い。しかし経営課題の設定ができない」(吉川教授)。この弱点を克服するために、第一線の実務家たちとの交流が盛んに行なわれている。ほとんどの教官が、現場から講師を招いており、旧科学技術庁出身の田村氏自身の講義では、中央官庁から政策担当者を招いた。吉川教授は自ら製造現場へ出向き、そのうえで現象の背景にある理論を解説する。「現場と理論の落差を、受講生自身に埋めてもらう」(吉川教授)。

学生には現役の企業人も多く、生の情報を豊富に持っているが、それぞれの問題を公にすることには抵抗が強

い。ケースを提供した企業には利益を還元する、そうした文化を育てる必要性がある、と両氏は感じている。

町工場に埋もれた先端技術を掘り起こしていきたい

1年制の学生・恩田克己さんがMOTを学び始めたのは、工作機械メーカーでの経験がきっかけ。「大手の下請け。でも、どこにも負けない技術を持つ会社だった。そんな企業こそ表舞台に立たなくては」。遠藤功教授の経営戦略論では、部品管理のまずさがコストを押し上げ、新製品開発にまで悪影響を及ぼす事例に、自らの経験を重ねた。松田修一教授の起業進化論では、新事業が人間関係で崩れていく様に、経営の生々しさを知った。「町工場には優れた技術が埋もれている。そこを掘り起こしていきたい」。卒業後の方向は鮮明だ。(山本)

注目講義

吉川智教 イノベーション・マネジメント、生産管理システムベンチャー企業の研究から、プロダクト・イノベーションの本質を理解する。

田村泰一 先端技術政策論、産学官連携政策論 科学技術庁、文部科学省、経済産業省での経験を基に、技術経営戦略を展開。

松田修一 会計学、経営監査論、起業進化論 日本企業の再生をテーマに、将来のベンチマークとなるような企業を徹底調査。



Yoshinaka Wada

吉川智教・早稲田大学ビジネススクール経営専門職大学院 (MOT) 担当教授。担当科目は「イノベーション・マネジメント」ほか。



Yoshinaka Wada

田村泰一・早稲田大学ビジネススクール経営専門職大学院 (MOT) 担当助教授。文部科学省 (旧科学技術庁) 出身。担当科目は「先端技術政策論」ほか。

Mikio Shuto



MOT専攻1年の恩田克己さん。工作機械メーカー勤務を経て1年制コースに入学。

●恩田さんの履修スケジュール (秋学期)

	1時限	2時限	3時限	4時限	5時限
Thu.				電子商取引と起業	
Fri.	先端技術政策とマネジメント	新商品・事業開発方法論	ネットワーク・テクノロジー	プロダクション・アンド・テクノロジー・マネジメント	知識経営マネジメント
Sat.	経営・管理システム変革マネジメント	バイオ・マネジメント	生産における投資意思決定	生産経営システム設計	リスク・マネジメント

秋学期のスケジュール(1年を4期に分けるクォーター制)。1年制コースであるために、MOT開講日の金曜日、土曜日は1時限から5時限まで、フルに授業を履修。木曜日の「電子商取引と起業」はMBAコースの科目。ほかに通年のゼミ「経営管理システム進化の研究」と集中講義「ネゴシエーション技法」を履修。